

八王子遺跡出土の銅鐸について

樋上 昇

1. はじめに

平成9年3月13日、一宮市大和町荻安賀に所在する八王子遺跡の96J区において、倒立状態で埋納された銅鐸が出土した。その後、周囲の土ごと本センターに持ち帰って銅鐸を取り出したが、銅鐸の表面には土がこびりついていたので、奈良国立文化財研究所にクリーニングと保存処理を依頼することとなった。8月29日、処理が完了し、本センターに銅鐸が返却された。その結果、鈕に紐擦れの痕跡とみられる縦方向の光沢を確認することとなった。

2. 出土状況

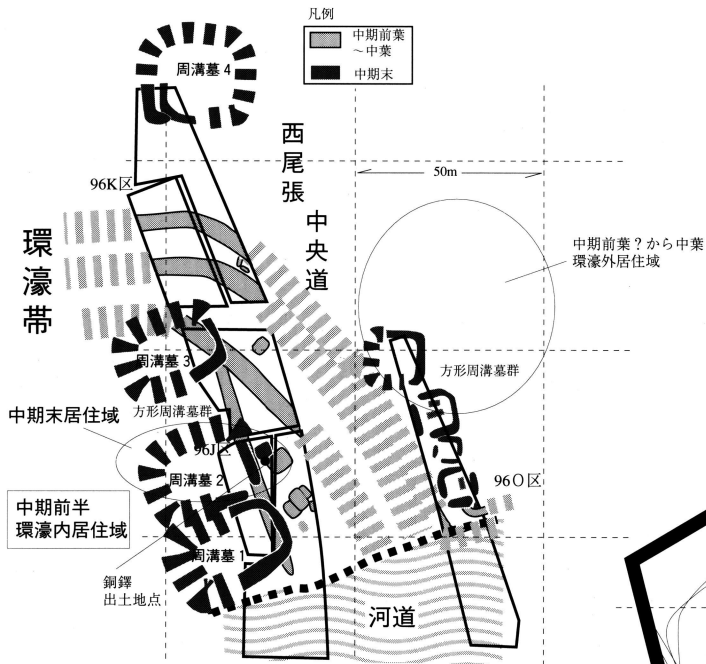
銅鐸は前述のように、96J区の北東隅近くに倒立状態で埋納されており、調査区内に残したセクションベルトを除去する際に発見した。96J区では弥生前期・弥生中期・弥生後期～奈良時代と3つの遺構面を検出しており、銅鐸埋納土坑は弥生中期の遺構面で確認した。この時期の居住域には幅約5m、深さ約1.5mの環濠が3条巡っている（第1図）。銅鐸の埋納位置は内環濠より約10m内（西）側にあたり、内環濠より分岐する溝の東側になる。周辺には中期中葉の竪穴住居・柱穴群が密集している。これらの遺構群の上には中期末の竪穴住居群があり、さらにその上にやはり中期末の方形周溝墓が築かれている。96J区には墳丘の長軸が20mを超える可能性をもつ巨大な方形周溝墓が2基南北に並んでおり（周溝墓1・2）、周溝墓2の東側にはこの周溝墓の墓前祭祀にともなうとみられる多量の土器廃棄を検出した（第2図）。銅鐸埋納土坑はこの土器廃棄層より約30cm下の面から掘り込まれており、層位的には弥生中期後葉～末頃に埋納されたと考えられる（第3

図）。

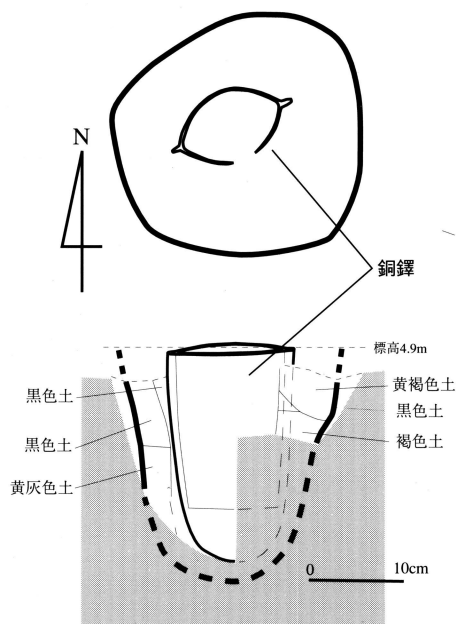
埋納土坑は長径28cm、短径25cm、深さ23cmのすり鉢状を呈しており、銅鐸はこのなかに鈕を下にしてほぼ垂直に埋められていた（第4図）。鰭の方向は東西方向から東で約25°北へ振っている。土坑内の埋土は下からは黄灰色土・黒色土・黄褐色土の順に堆積しており、埋納土坑の掘削土とその周辺の土で埋められた可能性が高く、特に銅鐸本体を木箱や布状のものでくるんでいたような痕跡は認められなかった。銅鐸の内部にも黄褐色土が充填されており、舌の共伴はなかった。

銅鐸の埋納方法については一般的に鈕を横にし、鰭を立てた例が圧倒的に多く、次いで鰭を横に寝かせた例が若干認められる。倒立の埋納例については、寺沢薫氏の研究によると徳島県西矢野源田銅鐸（扁平鈕式2点、突線鈕1式1点、銅剣共伴）の3点と島根県志谷奥銅鐸（外縁付鈕2式、扁平鈕式各1点、銅剣共伴）の2点がある（寺沢1992）。ただし、西矢野源田銅鐸については1948年の出土であり、正確な出土状況は明らかでない。志谷奥銅鐸は丘陵斜面をカットして幅30～38cm、奥行き66cmの長方形の土坑を掘削し、土坑内の山側斜面に立てかけられたような状況で出土している。八王子遺跡出土銅鐸（以下、八王子銅鐸とする）の場合は銅鐸本体がぎりぎり入る規模の小土坑を掘削し、土坑内で銅鐸が垂直に立つように銅鐸の周囲と内部に土を入れている。

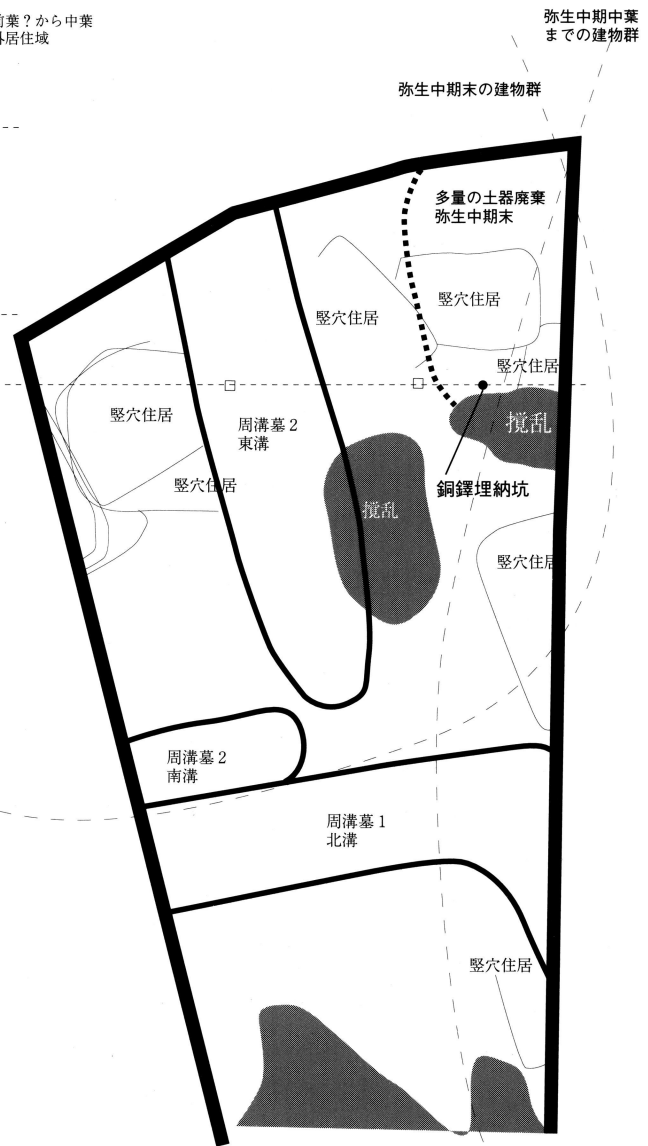
倒立以外に、鈕を上にした正立状態の埋納例は島根県上府銅鐸（扁平鈕式2点）、兵庫県野々間1号銅鐸（外縁付鈕2式1点、扁平鈕式1点共伴）、香川県安田銅鐸（扁平鈕式1点、銅剣2点共伴）、大阪府四條畷市出土銅鐸（扁平鈕式2点、大小入れ子）、滋賀県山面高塚銅鐸（扁平鈕



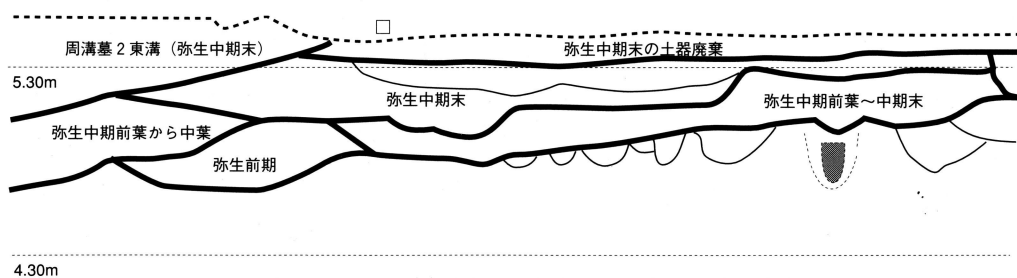
第1図 弥生中期遺構概略図 (1:200)



第4図 銅鐸埋納状態図 (1:8)



第2図 96J区遺構概略図 (1:250)



第3図 銅鐸埋納地点土層堆積状態図 (1:40)

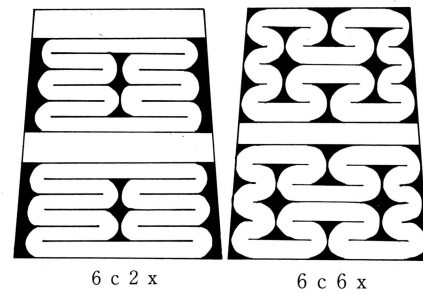
式2点、大小入れ子）、三重県神戸木ノ根銅鐸（外縁付鈕2式1点）の6遺跡9点が知られている。このうち大半は1930年代以前に出土したものであるため、正確な出土状況はわからない。1981年に出土した兵庫県野々間1号銅鐸は報告書によると、丘陵斜面を掘削してテラスをつくり、これを埋め立てた後に径18cm、深さ約20cmの土坑を掘削して銅鐸を埋納していることが明らかとなっている（春日町1990）。八王子銅鐸も実際検出したのは円形の小土坑のみだが、弥生中期当時の生活面が現在の検出面よりさらに数十cm高かったとすると、埋納土坑掘削面より上にはさらに大きな作業スペースが設けられていた可能性が高い。このように銅鐸を埋納するために、比較的大規模な作業用のテラスを設ける例は他にもいくつか認められる。

また、集落内とその周辺から出土した銅鐸は、大阪府跡部銅鐸（突線鈕2式、中期末～後期後半）、徳島県名東銅鐸（扁平鈕式、中期末～後期前半）、同県矢野銅鐸（突線鈕5式、後期後半）、岡山県高塚銅鐸（突線鈕2式、後期前葉）、奈良県大福銅鐸（突線鈕1式、後期末～終末期）、愛知県朝日銅鐸（突線鈕1式、終末期）の6例がある（菅原1997）。八王子銅鐸は後述のように外縁付鈕1式で埋納時期も中期後葉～末頃と、他の集落埋納例より明らかに古い時期の埋納である。

3. 八王子銅鐸の概要（第5図）

法量は器高21.6cm（鐸身16.8cm、鈕4.8cm）、底径は長径11.3cm（鰭間で13.4cm）、短径7.8cmで、重量は内部に若干の土を残した状態で814.9gある。

型式は鈕の形態から、外縁付鈕1式であることが判明した⁽¹⁾。鐸身の型持ち穴が中横帯にかかる位置にある点もそれに矛盾しない。ただし、飾耳の痕跡が鈕と鰭の境にあり、飾り耳の脚が鰭を

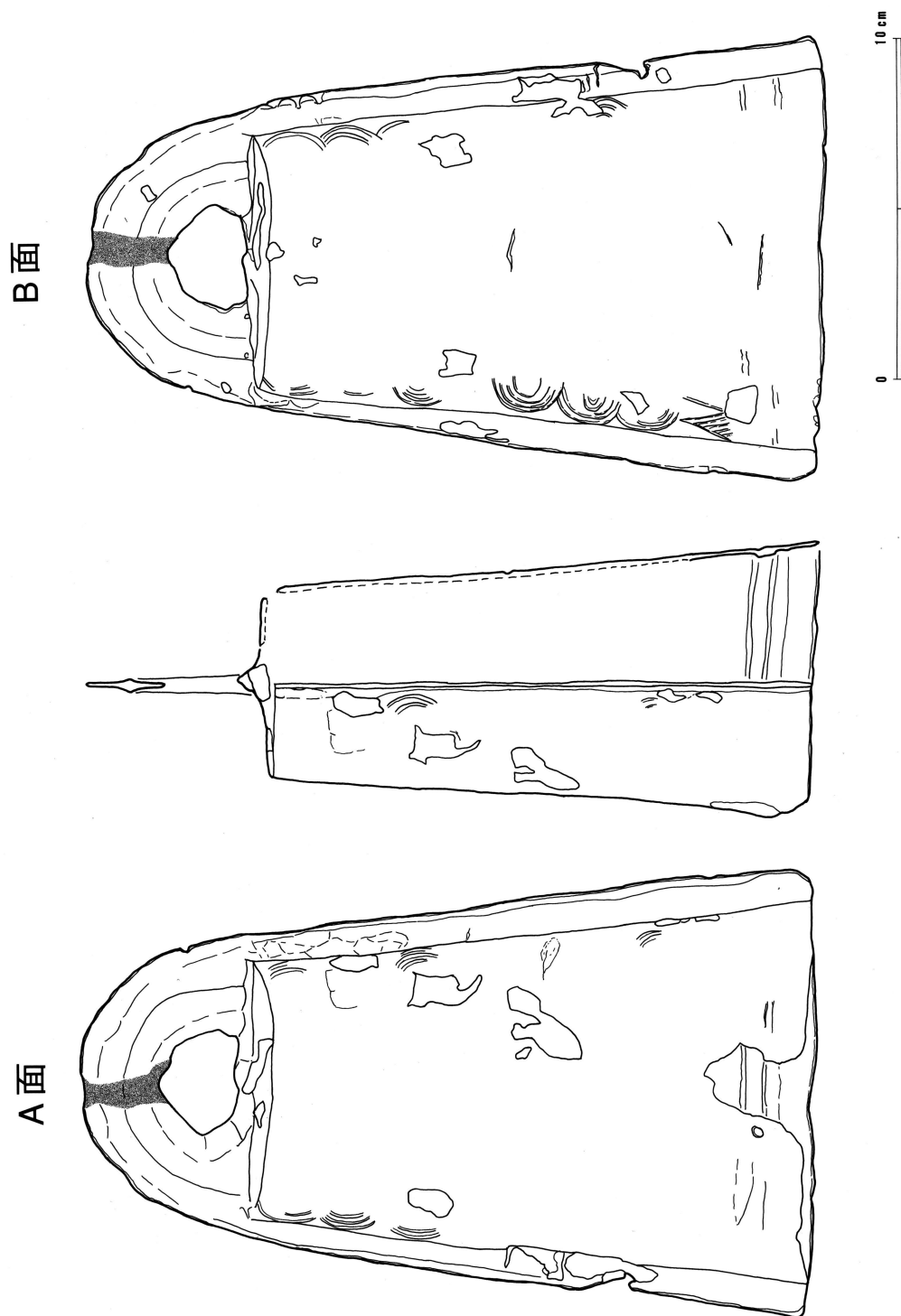


第6図 流水紋の2類型

貫いているようにみえることから、外縁付鈕1式のなかでは新しい要素をもっている⁽²⁾。

発掘調査の時点では表面に土が固着していたために紋様は不明であったが、クリーニングの結果、鰭の付近でかろうじて流水紋を確認することができた。紋様構成は2区の流水紋で、下辺横帯にはR鋸歯紋を配する。中横帯は現状では無紋にみえる。上半部の流水紋帯は舞の直下から始まっており、上辺に横帯はない。流水紋帯は上・下とも両端部に3箇所屈曲部をもつが、中央付近は磨滅により不鮮明である。流水紋の線数は5条である。

両端3箇所ずつの屈曲部をもつ流水紋のパターンは佐原真氏の分類によると、6c2xと6c6xの2通りしかない（第6図、佐原1996）。うち、6c2xは複合縦型流水紋で、伝滋賀県出土・辰馬考古資料館407号銅鐸、出土地不明・同資料館414号銅鐸（以上同范、外縁付鈕1式）、香川県我拝師山銅鐸、大阪府桜塚銅鐸（以上同范、外縁付鈕2式）、兵庫県気比2号銅鐸（外縁付鈕2式）の流水紋の一部にみられる。これらのうち、我拝師山銅鐸と桜塚銅鐸は大阪府東奈良遺跡で出土した石製鑄型で製作されたことが明らかになっていることから、6c2xの流水紋銅鐸は、おおむね摂津地域で生産されていたものと考えられている（難波1991）。ただし、これらはいずれも上辺に横帯をもつ点を特徴としていることから、八王子銅鐸はこの型式には含まれず、消去法的ながら、6c6x



第5図 八王子銅鐸実測図（1：2）

であることが確定した⁽³⁾。6c 6xの流水紋銅鐸は八王子銅鐸を除けば、大阪府神於銅鐸、兵庫県桜ヶ丘2号銅鐸（以上同範）、伝静岡県井伊谷出土銅鐸⁽⁴⁾（辰馬考古資料館412号銅鐸）の流水紋の一部の3例が知られており、いずれも外縁付鈕1式に属する。この6c 6x流水紋は畿内南部（大和・河内・和泉）の弥生Ⅱ期（中期前葉）に属する壺に施された横型流水紋を銅鐸の器面に収まるように、この地域の工人によって創出された初期の流水紋で、伝井伊谷銅鐸のB面下段の流水紋がそのうち最も古い例とされている（佐原・春成1995）。八王子銅鐸もこの6c 6xの流水紋を採用していることから、弥生Ⅱ期に畿内南部で製作された可能性が極めて高い。また、銅鐸の鰭など数箇所に範傷が認められることから同じ鑄型で作られた最初の銅鐸ではなく、2番目以降の製品であろう。しかし、現在のところこの八王子銅鐸と同範の銅鐸は出土していない。

八王子銅鐸は前述のように、器高はわずか21.6cmである。これまでに初期の流水紋銅鐸としてあげた例はいずれも30cmを超えており、特に6c 6xの流水紋銅鐸は40cm以上の大型品しかない。八王子銅鐸と同様の規模の流水紋銅鐸は奈良県名柄銅鐸（器高23.0cm）の1例のみである。これは片面が横帯紋で、もう片面に上辺横帯をもたない上下2区構成の4c 1x流水紋が施されている。型式は外縁付鈕1式で、全体のプロポーションも八王子銅鐸と極めて良く似ている。

八王子銅鐸のA面下端部には銅の湯まわり不良による欠損部分があり、その左側に直径約3mmの円孔が開けられている。これは鑄かけの足掛りの可能性があるが、湯まわり不良部分の周縁を削って加工していないために疑問が残る。また、この部分の内面には細かな擦痕がみられる。

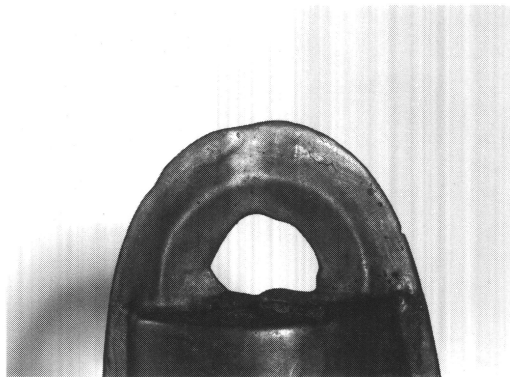


写真1 鈕に残る縦方向の光沢



写真2 内面突帯の磨滅

4. 鈕の紐擦れ痕跡について

最初に述べた様にクリーニングの結果、鈕のほぼ中央に約1cmの幅で帯状に縦方向の光沢が残っていた（写真1）。これはA面・B面とも同じ位置についており、手で触れると周囲に比べて明らかにくぼんでいる。さらに、その光沢の帯の上端部と下端部もへこんでおり、しかも薄く尖っている。以上の状況から、これは銅鐸を吊り下げの際についた紐擦れの痕跡であろうと考えている。従来、突線鈕1式段階までの銅鐸が実際に鳴らした「聞く銅鐸」で、突線鈕2式以降は「見る銅鐸」とされ、なかに吊した舌と触れあって音を出す内面突帯の磨り減り具合がその根拠となっている（田中1970）。しかし、鈕の紐擦れ痕についてはこれまで報告例は皆無であった。八王子銅鐸も内面突帯が著しく磨り減っており（写真2）、さらに磨滅は銅鐸本体の裾が尖るにまで至っている。

このような状態まで使用された銅鐸は他に例がなく、極めて長期間にわたって使用されたのではないかと考えられる。佐原真氏の年代観に従えば（佐原1996）、八王子銅鐸の鑄造時期は弥生Ⅱ期で紀元前2世紀頃、埋納時期が弥生Ⅲ期末～Ⅳ期初頭（中期後葉頃）で紀元前1世紀～紀元前後頃となることから⁽⁵⁾、百年以上におよぶ長期の使用によって、内面突帯が著しく磨滅するとともに鈕にも紐擦れの痕跡が残るに至ったのではないと思われる。また、鈕の下端部のみならず、上端部も磨り減ってくぼんでいることから、この部分にも力がかかる様な方法で紐が結ばれていたことがわかる。

5. まとめ

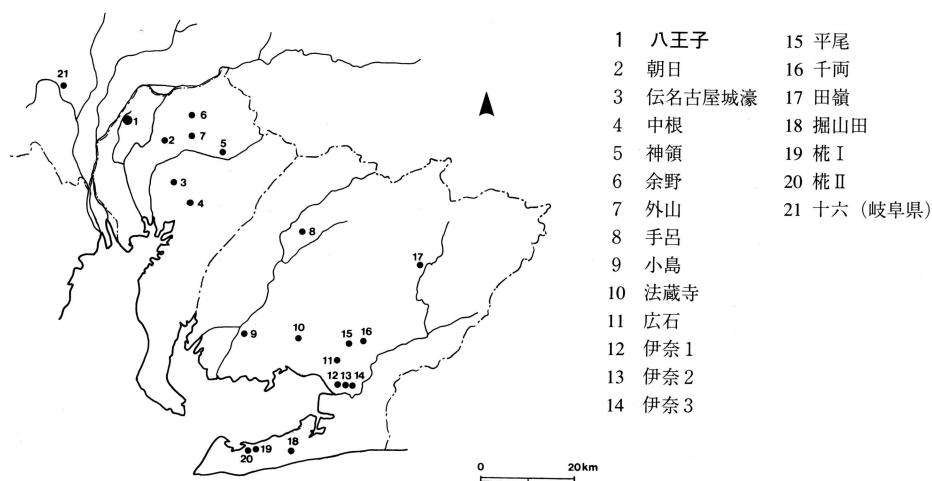
八王子銅鐸は弥生中期の集落内から倒立状態で出土した。おそらくはこの時期の集落の廃絶に際して埋納されたものと思われる。集落内の埋納例としてはこれまでで最も古く、弥生中期後葉～末頃である。

倒立・正立を含めた垂直埋納の銅鐸の型式をみると、八王子銅鐸が外縁付鈕1式と最も古く、源田3号銅鐸の突線鈕1式が最も新しい。それ以外

はいずれも外縁付鈕2式～扁平鈕式に属することから、弥生後期以前の銅鐸埋納方法には、鱗を立てた横向き以外のさまざまなパターンが存在していた可能性がある。また地域的にみると、四條畷市出土銅鐸を除いていずれも畿内の周縁部にあたっているのが注目される。

紋様は上下2区の6c6x流水紋で、器高は21.6cmと、流水紋銅鐸としては全国最小である。これまでに同範銅鐸はないが、器面に範傷があることから、2番目以降の製品と考えられ、今後は同範銅鐸の出土が期待される。器面を6c6x流水紋で飾る銅鐸は現在のところ大阪府神於銅鐸・兵庫県桜ヶ丘2号銅鐸（以上、同範）・伝静岡県井伊谷銅鐸の3例しかないことから、八王子銅鐸もこれら一連の銅鐸を作った工人集団による製品である可能性が高い。なお、愛知県内出土の流水紋銅鐸としては御津町広石の銅鐸、伝愛知郡出土銅鐸（以上、同範で扁平鈕式）に次ぐ3例目である。

これまで愛知県内では、尾張で12点（うち現存は6点⁽⁶⁾）、三河で31点（同13点）、合計43点の銅鐸が出土したとされており（清洲貝殻山貝塚資料館1991）、八王子銅鐸は44点目となる（第7図）。小牧市外山の銅鐸と豊川市千両の銅鐸が外



第7図 愛知県内銅鐸出土地一覧（現存するものに限る）
（清洲貝殻山貝塚資料館1991をもとに作成）

縁付鈕2式で最も古かったが、八王子銅鐸は外縁付鈕1式でこれらより古く、県内最古の銅鐸となる。東海地方では岐阜県大垣市の十六銅鐸が菱環鈕2式で、八王子銅鐸はこれに次ぐ古さである。大垣市が位置する西濃地域と八王子遺跡がある尾張北部地域は木曾三川をはさんで地理的に極めて近く、かつ濃尾平野の西端にあたることから、畿内から東海へ銅鐸が流入するルートとしてこれからも注目される。

八王子銅鐸の鈕には吊り下げた際の紐擦れによる光沢を確認した。これまでに出土した約470点におよぶ銅鐸には鈕に面的な紐擦れ痕が残るという報告例はないが、鈕の上端部と下端部が対応する位置で不自然にくぼんでいる例は扁平鈕式より古い段階の銅鐸にいくつか認められる。先日、大阪市立美術館の「古代出雲文化展」で神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸をガラス越しながら実見することができた。観察の結果、神庭荒神谷遺跡の5号銅鐸（菱環鈕1式）は鈕の上端部がほぼ平らに減っており、その下は鋸歯紋が不鮮明になっていた。2号銅鐸（外縁付鈕1式）は鈕の下端部が極端にえぐれている。4・6号銅鐸（いずれも外縁付鈕1式）も鈕の下端部にくぼみがみられ、6号銅鐸は上端部もわずかにえぐれていることを確認した。そのほか写真による観察では、東京国立博物館所蔵の菱環鈕1式銅鐸（出土地不明）は鈕の中央部のみ稜線が不明瞭である。兵庫県中川原銅鐸（菱環鈕1式）もやはり鈕の上端部が平らになっている。このように、菱環鈕式および外縁付鈕式段階の銅鐸には少なからず紐擦れによって生じたとみられる痕跡を鈕にとどめていることが確認できた。今後は肉眼観察のみならず、電子顕微鏡などでより詳細に検討し、光沢の原因となっている微細な傷の観察から、吊り下げた紐の材質を特定していきたいと考えている。

石製鋳型で製作したとされている初期の銅鐸に

は鋳上がりが悪く、紋様も不鮮明なものが多い。八王子銅鐸も鈕や中央の横帯に紋様がみられず、流水紋や下辺横帯の鋸歯紋も極めて不鮮明である。しかし、銅鐸の器面を詳しく観察すると、縦方向の極めて微細な加工痕が鐸身のはほぼ全面に認められることから、単なる鋳上がり不良ではなく、使用されていた当時何らかの方法で銅鐸を磨いていたことも紋様が不鮮明な要因の一つと考えられる。もしそうだとすれば、磨いた材質の特定が今後の課題となる。また、八王子銅鐸は使用頻度が他の銅鐸に比べて極めて高い（あるいは使用期間が長い）ことから、銅鐸がどのように管理されていたのかを考える手掛りともなろう。

八王子銅鐸は器面に錆びがほとんどみられず、遺存状態は極めて良好である。そのため、これまで述べてきたような、他の銅鐸では知り得なかった情報を多数秘めている可能性がある。倒立という特異な埋納状況も含めて、これからもさまざまな視点から研究を進めていくことが必要であろう。

最後になったが、八王子銅鐸については伊藤秋男、井上洋一、佐原真、寺沢薫、植崎彰一、難波洋三、春成秀爾、渡辺誠氏らの御指導を受けたことを感謝する。特に八王子銅鐸の所見と類例については難波氏から懇切なる御教示を得ており、本稿の骨子となっている。重ねて感謝の意を述べておきたい。

注

- (1) 八王子銅鐸の型式については佐原氏と難波氏の分類に従っている。
- (2) 難波氏の御教示による。
- (3) 難波氏の御教示による。
- (4) 伝静岡県井伊谷出土の辰馬考古資料館412号銅鐸については、井伊谷出土の可能性は極めて低く、最近は出土地不明銅鐸として扱

われている（国立歴史民俗博物館1995
P.115）。

（5）銅鐸の型式変化とその年代観については佐
原氏のほか、岩永省三、酒井龍一、高倉洋
彰、寺沢薫氏らさまざまな説がある（酒井
1996）。

（6）このうち、余野の銅鐸は器高5.6cmの小銅鐸
（銅鐸形銅製品）であるため、尾張出土で
現存の銅鐸は、正確には5点である。

参考文献

- 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館 1991 『愛知の銅鐸』
特別展図録
酒井龍一 1996 「銅鐸の話・初級編（1）」
『みずは』第20号 大和弥生文化の会
佐原真 1960 「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系』2
日本Ⅱ 平凡社
佐原真 1996 『祭りのカネ銅鐸』歴史発掘8 講談社
佐原真・春成秀爾 1995 『銅鐸の美』国立歴史民俗
博物館 企画展図録 毎日新聞社
島根県教育委員会・朝日新聞社 1997 『古代出雲文化
展』図録
菅原康夫 1997 「銅鐸にこめられた弥生人の思想」
『銅鐸の谷 加茂岩倉遺跡と出雲』アサヒグラフ別冊
朝日新聞社
高倉洋彰 1996 「銅鐸の起源と文化」『戦後50年古代
史発掘総まくり』アサヒグラフ別冊 朝日新聞社
辰馬考古資料館 1978 『銅鐸』
田中琢 1970 「「まつり」から「まつりごと」へ」
『古代の日本』5 角川書店
寺沢薫 1992 「銅鐸埋納論」上・下『古代文化』44-
5・6 古代学協会
難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究』6 道具
と技術Ⅱ 雄山閣
難波洋三 1991 「同範銅鐸2例」『考古学研究紀要』
2 辰馬考古資料館
春成秀爾 1982 「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館
研究報告』1
春成秀爾 1987 「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物
館研究報告』12
兵庫県水上郡春日町 1990 『野々間遺跡』
三木文雄 1973 『銅鐸』日本の美術No.88 至文堂